

私たちの美作を紡ぐもの

～ 1300年の経と緯～

和銅6年（713年）4月3日、備前国から北部6郡（英多・勝田・苫田・久米・大庭・真島）が割かれ、美作は国として、そして言葉として誕生しました。それ以前、統一的な地域としての名称があったのかどうかは分かりません。しかし、この時、私たちが住むこの地は、名実ともに「美作」となりました。今から1300年前、私たちの大先輩はその一歩を踏み出し、美作の歴史を歩み始めたのです。現在まで続く美作が培ってきたものについて、津山郷土博物館の尾島治館長にお話を伺いました。



津山市郷土博物館 尾島 治 館長

美作はひとつ

江戸時代初期、正保2年（1645年）刊行の俳諧書「毛吹草」が、美作国名産として取り上げた産物は4品で、『塩硝、木地、高田硯、誕生寺誕生木数珠二用之、法然上人誕生所也』とあります。この時は、森家が美作一国を治めていた時代で、政治的に美作はひとつでした。元禄10年（1697年）に森家が改易となり美作国内が分割されても、「美作鬘鏡」や「美作風土略」「美作鏡」など、美作は一つの範囲として語り続けられ、美作をひとまとまりと考える意識は変わっていませんでした。また、江戸時代の大名は、将軍家への献上品や他の大名への贈答品に、御国元（領内）の産物を用いることが多くありました。津山藩主の松平家でも、さまざまな名産品を贈っています。最近の研究によれば、必ずしも松平家領内の産物のみではなかったといえます。松平家にとって「国元」とは、領地ではなく美作国を指していたのです。

美作を紡ぐもの

私たちが長い年月受け継い

できた美作とは、一体何なのか。地域の文化を代表するものとして言葉がありますが、美作の方言には、古代の言葉が色濃く残されているといわれます。美作で分らない方言を聞いたら、国語辞典ではなく、古語辞典で調べればその意味が分かるという冗談もあるほど。しかし、言葉は閉鎖的に受け継がれてきた訳ではありません。美作の人びとは、美作国成立前から、山陰や山陽を始めとする各地と物資の交流を行ってきました。そして、都と諸国を結ぶ官道の整備が進み、美作国が成立した後は、その交流範囲はさらに広がっていったでしょう。中世になって武士社会が到来すると、多くの武将が遠く離れた所領へと移り住みました。関東や九州から美作にやって来る武将もいました。戦国の世を経て、慶長8年（1603年）、美作国に入封した森家は、家臣や商人・職人たちと共に、出身地である東美濃地域の言葉や習慣をもたらし、その後の松平家も、越前や越後、あるいは江戸の言葉や文化を伝えたと考えられます。全国へと交流が広がり婚姻の範囲も拡大

美作の歴史を楽しく学ぶ 歴史冊子を制作！

建国1300年記念事業では、美作国の歴史冊子「みんなで学ぶ・ふるさと美作のあゆみ」を制作しています。旧石器時代から現代までの美作の出来事をまとめた1冊。写真やコラムなどをふんだんに使っており、楽しく学べる内容になっています。美作地域の小学校などで使われるほか、図書館でも見るできるようになります。



美作のことがとってもよく分かる冊子なんじゃ。やさしい言葉で書かれていて丁寧な解説も。これを見てワシももう1回勉強しよ。